

# 大動脈弁狭窄症 広がる新施術

## 東北3病院が導入

心臓の大動脈弁が開きにくくなる「大動脈弁狭窄（きょうさく）症」の治療に、カテーテルを使って人工弁を埋め込む新しい施術法が広がっている。東北では仙台厚生病院（仙台市）など3カ所の医療機関が導入。開胸手術と比べて患者の体への負担が軽く、高齢患者の新たな選択肢として期待されている。

大動脈弁狭窄症は、加齢などにより大動脈弁の開きが悪くなり、血の流れが妨げられる疾患。症状が進むと動悸（どうき）や息切れの症状が現れ、突然死に至るケースもある。

新しい治療法は「TAVI（タビ）」と呼ばれる。切開したあばら骨の間や太ももの付け根にある大腿（だいたい）動脈から、先端に人工弁を付けたカテーテルを挿入。大動脈弁の位置で人工弁を広げる。

開胸手術は一時的に心停止させるため、患者の体への負担が大きい。体力的に手術に耐えられない80代以上の高齢者らは、外科治療を断念するしかなかった。

TAVIは昨年10月に保険診療の対象となった。TAVIを実施できる認可施設は全国2カ所。東北では岩手医大病院循環器医療センター（盛岡市）と東北大病院（仙台市）も認可を受けた。

仙台厚生病院はことし1月に認可を受けた後、80、90歳の男女14人で施術した。循環器内科の多田憲生医長は「手術を諦めていた患者の希望の光になる治療法。新たな選択肢として多くの人に知ってもらいたい」と話す。

### カテーテルで人工弁埋め込み 開胸不要、患者負担軽く